

南アフリカ、アパルトヘイト

角和昌浩（かくわまさひろ）

要約 シェルのシナリオチームは1991年から92年にかけて、南アフリカ共和国の未来を探索するシナリオプロジェクトにかかわった。当時の南アはアパルトヘイト（人種差別）体制がいよいよ終焉を迎え、次代の政治社会経済システムの在り方を模索していた。国内が騒然としていた。シナリオチームはここで現地に入り、得難い体験をし、それは後に生かされる。今回投稿ではアパルトヘイト体制の成立経緯、ネルソン・マンデラ解放運動と暴力の応酬、国際的な対南ア経済制裁など、南ア現代史のおさらいを中心に書きます。

1. はじめに

読者諸賢、ご息災ですか？

2020年初より世界はコロナ禍に見舞われています。皆様の身近にも苦しまれた方々がおられることでしょう。いくつもの国の市民社会は、大量死という深甚な打撃に耐えねばならなかった。世界は、我々の社会は、悼むという経験をくぐりました。

さて今回投稿から、筆者は1990年代前半にシェルのシナリオチームが経験した珍しいプロジェクトについて語り始めます。チームは、南アフリカのアパルトヘイト（人種差別）体制の崩壊から、マンデラ革命に至る現地の社会情勢に、短期間ではあるが深くかかわりました。

筆者は1991年秋にはロンドンのロイヤル・ダッチ・シェル本社のシナリオチームで働き始めていた故、これを自分の体験として書き残します。

本投稿では、最初にこのシリーズ全体のあらすじを示します。続けてアパルトヘイトの由来や制度運用、そしてこの制度の終焉を辿ります。

このシリーズは5回の連載にする心づもりです。

2. 全体のあらすじ

1991年、時の南アフリカ大統領デ・クラークは、アパルトヘイト体制の終了を宣言した。移行期間をへて、1994年の国民総選挙が成功し、ネルソン・マンデラが大統領に就任した。

行き詰っていた状況が、突然、打開されたのだ。

アパルトヘイトとは、第2次大戦後に始まり約50年つづいた、白人層による対黒人・対有色人の社会差別問題である。が、国内を観察すれば、そこにはオランダ系と英国系植民者集団の、白人同士の政治経済的な対抗が見られた。

オランダ系白人がこの土地への移住で先行している。英国系は後発だったが、19世紀末、大英帝国本国が現地のオランダ系と英国系の対立に大規模介入した。世に言うボーア戦争である。大英帝国が勝ち、英国系の産業資本や金融資本の進出が盛んとなった。オランダ系は社会的な劣位に立たされたのだが、オランダ系政党の国民党が第2次大戦後の国民議会選挙に勝利して、政権を樹立し、そしてこの政権がアパルトヘイトという奇怪な体制を敷いたのだ。

この連載はシェルを中心に据えた歴史物語なので、石油エネルギービジネスの方面に少しく寄せます。

南アフリカは一次資源の豊かな、美しい国土を持つが、陸域、海域ともに石油・天然ガス資源に乏しい。戦後の物質文明をささえる石油を輸入しなければならなかった。この国では、輸入した原油を精製して石油製品化し、配送、卸・小売販売するという、日本と同型の消費地精製システムが成立した。このシステムを多国籍メジャーズが担っていた。Mobil、BP、Total、Shell、Caltexである。

ところで石油は産業と豊かな消費生活を支えるものだ。経済格差にあえぐ黒人層からは、外国籍石油会社がアパルトヘイト体制に加担しているようにも見えるのだった。国連が対南ア経済制裁を決めて石油禁輸を敷いても、なお、シェルをはじめ石油各社は南アに向けて原油を供給し続けた。